

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	インスリン療法中の高齢者糖尿病患者が、在宅介入により内服加療へと変更しえた 1 例
演者名	岡田拓也 ⁽¹⁾ 、岡田智恵 ⁽¹⁾ 、大瀧学 ⁽¹⁾ 、岡田徹也 ⁽¹⁾
所属	岡田医院在宅医療部 (1)

目的

高齢者の糖尿病治療では、認知症などの問題により、服薬コンプライアンスの低下や、血糖変動時の対処の遅れなどが問題となる場面が多い。

今回、外来通院で 5 年間インスリン治療（グラルギン 20U/日）を行われていたが、血糖の乱高下を繰り返していた患者を、在宅介入による簡単な食事療法と、GLP1 作動薬への変更を行い、その後内服加療へ変更できた 1 例を経験したため、報告する。

実践内容

症例：87 歳 女性

傷病名：Ⅱ型糖尿病、アルツハイマー型認知症、高血圧、脂質異常症、足白癬

2006 年に HbA1c11%と高値のため、内服加療が開始となり、2011 年にインスリン療法開始となった。度重なる転倒と高度肥満のため通院困難となり、2013 年 8 月より在宅加療開始となった。

訪問開始時は、HbA1c は 9.5%で、一定の時間での血糖測定は困難で、血糖測定も感度以下の低血糖と 500 mg/dl 以上の高血糖を繰り返している状態であった。治療環境の確認を行ったところ、生活環境では日中独居（娘と二人暮らし朝 8 時から夜 8 時まで娘は仕事で不在）で、手技の実施状況も不定であり、食事は時間も不規則であった。間食も多くみられた。厳格な食事療法は困難であると判断し、間食の禁止のため室内よりお菓子などをなくした。インスリンと多量の SU 薬の併用により頻回に低血糖を認めたため、SU 薬を漸減し、8 月 31 日よりグラルギンを中止し、エキセナチドへと変更を行った。

実践効果

エキセナチドによる食欲減少作用と、間食の禁止で、体重は 12 か月間で 12 kg減少し、血糖値はエキセナチド開始後 100-200 mg/dl と安定し、HbA1c7.1%まで改善を認めた。そのため、2014 年 8 月 16 日よりエキセナチドを中止とし、グリメピリドとシダグリプチンの内服加療へと変更した。変更後も現在まで、HbA1c7%前後で推移し低血糖症状も認めず経過している。

考察

高齢認知症患者のインスリン治療は、外来治療では治療の状況把握が困難である。本症例では、在宅介入により、患者の生活環境、治療状況を確認することができ、その結果病状を大きく改善できる可能性があることが示唆された。